

2008年1月7日

第2763号

週刊(毎週月曜日発行)  
1950年4月14日第三種郵便物認可  
©医学書院2008  
購読料1部100円(税込)1年5000円(送料、税込)  
発行=株式会社医学書院  
〒113-8719 東京都文京区本郷1-28-23  
TEL (03)3817-5694 FAX (03)3815-7850  
E-mail: shinbun@igaku-shoin.co.jp

New Medical World Weekly

# 週刊 医学界新聞



医学書院

www.igaku-shoin.co.jp

## 今週号の主な内容

- 特集:『今日の治療指針』50周年
- [インタビュー]初代総編集者・日野原重明先生に伺う『今日の治療指針』の50年…1面
- [カラー解説]日本の医療の50年…2,19面
- [特別寄稿]『今日の治療指針』第50巻発行にやせて(阿部正和)…3面
- [新春座談会]歴代総編集者が語る『今日の治療指針』と日本の医療(多賀須幸男,尾形悦郎,山口徹,北原光夫,福井次矢)…4-7面
- [資料編]『今日の治療指針』の50年…8面
- 2008年学会・研究会開催一覧…9-13面

# 『今日の治療指針』50周年

## —さらなる医療の発展に向けて

『今日の治療指針』は、“私はこう治療している”をサブタイトルに、各領域第一線の専門家の手による毎年書き下ろしの形式で、臨床医が日常遭遇する疾患について、現時点の最新・最高の治療法を解説した治療年鑑です。

1959(昭和34)年に、日野原重明(聖路加国際病院内科医長)、石山俊次(関東通信病院外科部長)、渡辺良孝(東京厚生年金病院内科医長)の3先生(肩書はいずれも当時)によるご編集のもと、年刊本として創刊され、今年、記念すべき第50巻が発行されました。創刊時は内科・小児科を中心に疾患数は285、執筆者は250人、496ページの規模でしたが、現在では領域を全科に広げ、2008年版では1099疾患、1075人、1896ページとなっています。

本紙では新年にあたり、『今日の治療指針』の50年の編集史、そして日本の医療の50年の来歴を振り返る特集を企画いたしました。これまでのご愛顧に感謝いたしますと同時に、今後ともご愛読くださいますよう、よろしく願い申し上げます。

### インタビュー

## 初代総編集者・日野原重明先生に伺う『今日の治療指針』の50年

**『今日の治療指針』創刊の経緯**  
私は1951(昭和26)年に米国に留学しました。同じ年、日本では臨床病理学会が設立されました。検査技師の養成が急務ということで、この翌年、東京の文化短大に検査技師学校をつくり、その実習を聖路加で始めました。そして学会設立から20年後の1971年、ようやく臨床検査技師は国家資格となりました。そういった時期ですから、日本には内科の治療指針もないし、検査データの読み方さえわからないという状態でした。

米国では、内科における診断と治療の指針が“Current Therapy”というタイトルで、毎年出版されていました。きわめて簡潔な内容で、米国の開業医も、病院の医師も皆、持っていた。それで、帰国するとすぐに、日本版の“Current Therapy”を出したらよいのではと、医学書院に申し上げたのです。診療の第一線にいる医師が患者を診るときに、いつもその“治療マニュアル”を診察台に置いて、手軽にチェックできれば、診断と症状に対する的確な処置ができるのではないかと考えました。

そして『今日の治療指針』の出版が決まり、1959年に初版が発行されることになりました。編集内容は内科治療を中心として考えましたが、病気の治療は内科も外科もないので、臨床に徹し、幅広い知識のある内科医と外科医がチームで編集をしようということで、聖路加国際病院の内科医長だった私、厚生年金病院内科医長の渡辺良孝先生、関東通信病院外科部長の石山俊次先生のトリオが結成されました。

創刊当初から変わっていないことは、参考書なしで書き下ろしができる医師に執筆を依頼し、執筆者の選定は毎年変えるということです。そして教科書ではなく、臨床の最前線にいる医師が日々行っている内科治療の実践書、という特徴を出しました。これが「私はこう治療している」というサブタイトルにつながっているのです。このように、“Current Therapy”の流れを受けてはいますが、日本独特の編集方針の下に毎年刊行して、今日に至っています。

また、日本の医学部の分布にあわせて、全国のドクターに執筆を依頼したので、そのうちに

お呼びが来ない人は一流ではないと考えられて、自薦が非常に増えました。業績として「私は、何年版の『今日の治療指針』に書いた」と宣伝をする先生もおられたので、日本の医学界に大きな刺激を与えるものとなりました。

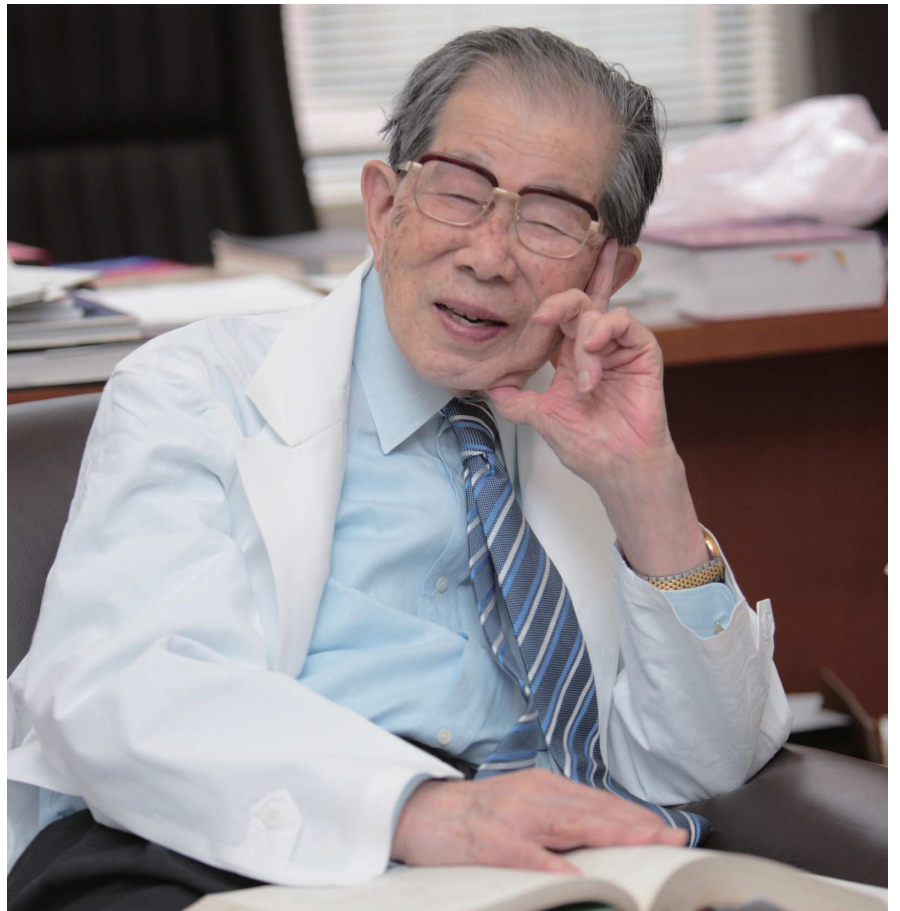
それから、『今日の治療指針』を1巻からずっと見ていくと、日本の内科治療の変遷がわかります。化学療法、患者の早期退院など、新しい考え方が次々と加わり、また入院中の処置や食事療法が年々どう変わってきたのか、などというこの50年の治療史が浮かび上がってくるのです。これは長く発行し続けられてきたことによる財産であり、非常に嬉しいことだと思っています。

**総編集者としての40年間を振り返って**  
——日野原先生には『今日の治療指針』創刊から1998年までの約40年間、編集に携わっていただきました。この間を振り返ると、どのようなことが思い出されますか。

まず、私の専門の循環器では、かつて心筋梗塞には安静を推奨していましたが、安静は不要で10日以内に退院させること、バイパス手術でも1週間以内に帰すというのが私の方針でした。患者は早く日常生活に戻ることができるし、在院日数の短縮にも貢献しました。『今日の治療指針』にも同じ主張のドクターに書いていただくなど、力を注ぎました。

いま私が『今日の治療指針』に執筆するなら、「安静の功罪」について書きたい。聖路加では個室のベッドの一部を、昼間は壁にはめこんで寝られないようにして、安静群とのコントロールスタディを行おうとしています。

私がいちばん発想の転換とは、このようなことなんです。治療というと、どうしても薬物治療が主体になるけれど、例えば、腹臥位にすれば肩も凝らない、床ずれができない、痰の咯出も容易になります。生活の仕方による治療法をもう少し大切にしたいと思っています。



「血管とともに老いると言うけど、僕は『今日の治療指針』とともに老いる(笑)」  
(『今日の治療指針』総編集は長くお務めくださる先生が多い、という編集部コメントを受けて)

にもなかったもので、海外の知見に頼るしかありませんでした。内科的疾患には、感染症が重要ですから、後に専門家として北原光夫先生(現・慶應義塾大学病院)に編集陣に加わっていただいたことは、大きな変化でした。

また内科に関連して眼科、皮膚科、耳鼻科といった疾患の患者も内科医が診る機会が多いですから、内科以外の各科のベテランにも書いてもらうようにも努めましたね。まだ日本の臨床家は偏っていますから、general medicineを理解できるようにカリキュラムをつくって、たとえば眼底や鼓膜などは、医師であれば誰でも診ることができるようにすべきだと言ってきたのです。

**次世代の医療者たちへ**  
——2008年の年頭にあたり、日本の医療に望まれること、特に若い医療者へのメッセージをお願いいたします。

若いドクターには、電子チャートやカルテを見ないと説明できない医師になってしまわないようにしてほしいです。頭のなかにケースをすべて入れて、診療にあたることを大事にしてほしい。外来中心の日本の医療ですから、先輩は外来にばかり行って、病棟は若いドクターに任せきっているのが現状でしょう。本来、指導をする立場の医長や部長の多くは外来に使われていて、病棟で指導することができないから、若い彼らは本だけで勉強する。そして本だけで勉強したことによる誤りを指摘できるような、ベテランのドクターがどの病棟にもいない。

米国では、ホスピタリストといって、チーフレジデントを経験した人が、病棟に常勤して若いレジデントを指導しています。これをなんとか日

本でも実現したい。そして、そういう年代の先生方に『今日の治療指針』を書いてもらえるといちばんよいのです。

私は訪問看護師にも教えていますが、心電図の読み方も教えて、診断ができるくらいになりなさいと言っています。米国では、麻酔の8割をナースが行っています。日本は、麻酔科医でないとだめだという。チーム医療をもっとナースに担当してもらうようにすると、医師不足は軽減される。看護大学も、大学院もあるんだから、専門性の高いナースとドクターと一緒に、診断は医師が行うとしても、治療は医師だけでなく両方ができるくらいになってほしい。

——最後に、医師になられて71年目を迎えられる日野原先生の、2008年の抱負をお聞かせください。

いま、音楽療法学会の理事長をやっていますが、緩和ケア病棟なんかには音楽は本当にいい。それから、認知症には特效薬がないけれど、音楽が刺激して患者さんが生き生きしてくるの。ご主人の名前は言えなくても、曲を流すと、歌詞が出てくるのです。不思議なことに、音楽と言語中枢がくっついているみたいだね。だから、家族も非常に喜びます。

私はときどき作曲もするんです。兎おいしかの山、で始まる「ふるさと」は、いまの若い人には歌詞の意味がわからない。そこで私は、歌詞に季節やロマンスを入れて、年を取っても、若くても、皆と一緒に楽しく歌える曲を、新しく作りました。この曲は「千の風になって」に負けないほど、流行させる野心を持っているんです(笑)。また、安らぎの音楽を日本全国に宣伝しようと思っています。